

精神科レジデントマニュアル

三村 將【編】

前田 貴記, 内田 裕之, 藤澤 大介, 中川 敦夫【編集協力】

評者

堀口 淳

島根大教授・精神医学



慶應義塾大学陣の大傑作である！『精神科レジデントマニュアル』というタイトルだが、全科の医師の手元に置いてほしい。熟練の内科医や外科医などの診察室にも置いてほしい。なぜなら、からだを傷めている患者も、すべからず毎日の心痛と苦闘しているのだ。

患者の「患」の字は、「心」の上に「串」が刺さっている。これがすなわち「患う」ことの語義である。この「串」を抜かねばならぬ。

臨床医の日常診療は、訊いて、尋ねて、診て、見て、頷いて、共に悲しんで、笑って、また啼いて、常に患者の「心」を傷めている「串」を探し当て、なんとかして、何度も何度も、患者と「串」を見つけない、引っ張り出し、これが「串」だったのかと見つめ合い、暗いトンネルから、共に明かりを探し出し、膿を出し、光でこころを消毒して、明日を信じて頑張り合う、そんな日常、そんな診療であってほしい。

第1章の「精神科診療の7つの心得」は「臨床全科の7つの心得」に通じる。精神科医に限局すれば、「③ポケットには聴診器と打鍵器を」とは、よくぞ書いていた

だいた！精神科医のハンマー離れはもうとくにレッドカードのご時世、さてどうするものぞ、と嘆き、あっちこっちでぼやき、嘆いている私には、ナイスショットの一言。涙が出た。フロイトは神経学、神経病理学からスタートしたのだ。小難しい話ではない。神経学とは身体に触れることである。

第2章は、当直医に必須な知恵をコンパクトにまとめてある。一般救急には、精神不安定な患者が山ほど集まってくる。外来、病棟別の対応原則のコツまで丁寧に記載されている。いい。

第3章では異常脳波のまとめが特にいい。この手のまとめ方は初めて見た気がする。

さて、第5章の診断編のうち、「面接の進め方」もいい。そう、すなわち次の治療編との連関の指摘は、ついつい忘れられがちであるからだ。すなわち予診など、「病気の洗い流し」といった患者との共同作業から、既に治療が始まっているのだ。予診、問診の段階から、患者や家族は医師を診ている。鑑別している。「頼れるか、本気になれるか、話せるか、この医師は」と。これも、全科共通の話で

もある。薬物療法は、原則論中心である。一体この薬は抗うつ薬なのか、抗精神病薬なのかがわからない時代になってきた。そんななか、基本が学べる。

第6章「主要症候、主訴」には精神要素ごとに、臨床現場にすぐに応用できるような配慮が記載され、好感が持てる。しばしば精神科以外の先生や若手の精神科医からさえ、「この幻覚、幻聴は」などとの、混乱発言を訊く。このモヤモヤをなくしたい私は、すっきりできた。

最終盤回りには、現代のホットニュースたる自動車運転問題や女性精神医学なども網羅されている。その割には、本書は白衣のポケットサイズだし、軽い。紙面はオレンジ色の濃淡で、ケバくない。三村教授の性格か？これ、いける！！

B6 変型・頁 352

2017 年 3 月

定価：本体 3,800 円＋税

〔ISBN978-4-260-03019-9〕

医学書院刊